

適切な温度管理で育苗期の病気を防ぎましょう！

～健苗を育てるための6つのポイント～

3月～4月の育苗期間は低温や日照不足などにより天候が不安定です。育苗時の温度管理は、発芽率の低下や細菌性の病害や糸状菌（カビ）による病害の発生を防ぐために重要です。

ポイント1 まずは、育苗箱の消毒を！

- 育苗箱等の資材には病原菌や多くの雑菌がついており、病気の要因となる可能性があります。育苗箱の消毒は、ケミクロンGの希釈液に浸漬又は希釈液をジョウロで散布しましょう。

ポイント2 種子消毒を確実に！

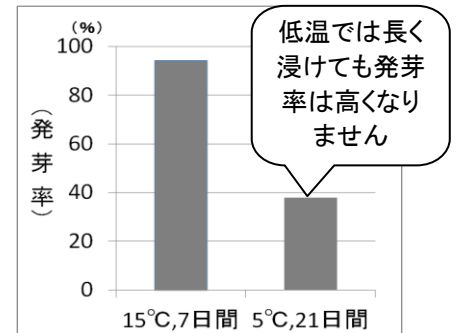
（自家採種の場合は、必ず塩水選をしましょう）

- 種子消毒には、ヘルシードTフロアブルなどの「馬鹿苗病」と「もみ枯細菌病」に登録のある薬剤を使用しましょう。**浸漬は水温10～15℃で実施します。**

注：スターナ剤は、千葉県内でも「もみ枯細菌病」と「褐条病」に対する耐性菌が確認されています。

ポイント3 浸種の水温は10～15℃で！

- **浸種の水温が20℃以上になると細菌性病害の発生を助長します。**
浸種期間の目安：10℃の場合は10日、15℃の場合は7日
- **浸種（消毒を含む）の水温が低いと発芽率が低下します。**
- 低温貯蔵種子は、水温が低い（10℃未満）と、特に発芽率の低下が大きいため適切な管理が必要です。
- 浸種容器の置き場所に注意し、気温低下時には保温をしましょう。



ポイント4 催芽の温度(水温または気温)は30℃で！

- 必ず催芽を行いましょう（ハト胸状態になるまで確実に！）。

ポイント5 は種時には、培土に薬剤を処理して病気を予防！

- は種時（覆土前、覆土時など）には、**カスミン粒剤、カスミン液剤、フタバロンA粉剤のいずれか**を使用し、「もみ枯細菌病」や「苗立枯細菌病」等の細菌性の病害を予防しましょう。

ポイント6 は種後～緑化期は、床土温度のこまめな確認で適正温度を保つ！

は種後の
温度管理
の
ポイント！

	出芽		緑化 (稚苗)	硬化 (稚苗)
	加温出芽	無加温出芽		
日数の目安	2日	5日前後	2～4日	15～20日
温度	昼	30℃	20～30℃	20～25℃
	夜	30℃	10～20℃	10～20℃

- ハウス内の温度よりも、種子や苗のある**遮光シートの内部や床土の温度に注意**しましょう。
- 細菌性病害の発生予防のために、**床土の温度を30℃より高くしない**ようにしましょう。
- 平置き育苗では、被覆資材によって出芽などに与える影響が違うので、資材の特徴を確認し、資材に合った管理をしましょう。

	高温時（晴天）	低温時（曇雨天）
遮光率の高い資材（太陽シートなど）	出芽は良好	出芽不揃いになりやすい
遮光率の低い資材（保温マットなど）	高温障害が出やすい	出芽はほぼ良好